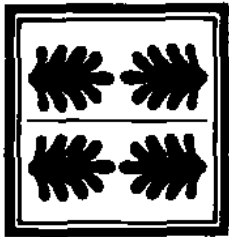


粘土の犬

仁木悦子





講談社文庫

粘土の犬

仁木悦子

昭和52年3月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国オフセット株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社国宝社

© Etsuko Niki 1977

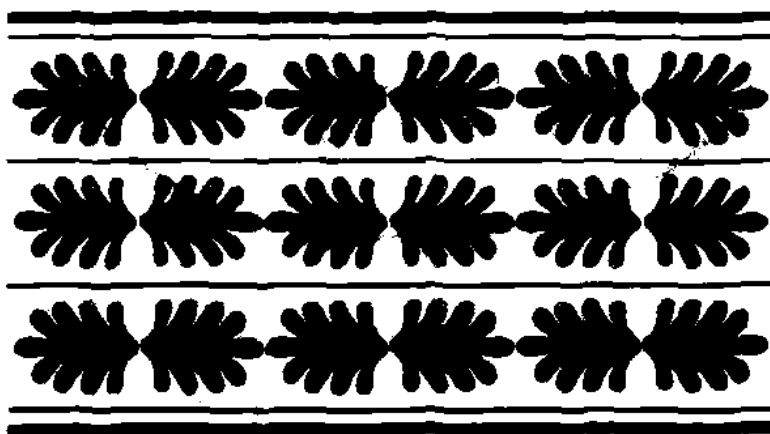
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

粘土の犬

仁木悦子



講談社

目次

かあちゃんは犯人じゃない

灰色の手袋

黄色い花

弾丸は飛び出した

粘土の犬

仁木悦子の人と作品

七

五一

一〇一

一三九

一七九

二〇六

西村京太郎

かあちゃん
は犯人
じゃない

「やい。ここのシャボン使いやがったの、だれだあ」

とうちゃんのどなり声だ。おれはマンガの本をほっぽり出して、畳の上にはね起きた。シャボンで、どのシャボンのことだろう？ 首をすくめて考えた時、台所でかあちゃんが何かぼそぼそ言うのが聞えて来た。なあんだ、おれが怒られるんじゃないんだ。——考えてみれば、このおれには、怒られるいわれなんかありやしないんだ。朝起きてからこっち、顔も手も洗った覚えがないんだもの。とうちゃんのシャボンになんか、さわるわけがない。

だいたい朝起きて顔を洗うなんてのは、全くくだらない習慣だ。水道のメーターが上って、手拭がすり切れて、シャボンが減って、手がくたびれて、そのあげく、ほっぺたの皮がぴんとつっぱったようになるだけなんだからな。

もつとも、これがかあちゃんだったら話は別だ。おれは、かあちゃんには大いに顔を洗ってもらいたいと思う。顔をきれいに洗って、おしろいをうっすらと塗り、口紅やお紅もつけてもらいたいんだ。ずっと前、小料理屋の女中をしていたころは、少し塗り過ぎてシツクイ壁みたいだったのを覚えているが、このごろのように塗らないとまた、どうもばばあくさくっていけない。かあちゃんは、十七の時におれを生んだ。だから今年二十八のわけだ。二十八といえはまだ若い

し、顔だつてあんなにべっぴんなんだから、うんときれいにしてて欲しいと思う。

台所では、とうちゃんがまだガミっている。いったい全体かあちゃんが、どんな悪いことをしたつてんだ？　とうちゃんなんか、いつもどこかをほつつき歩いちゃ人相のよくないあんちゃん連と酒を飲んで、おれには、カリン糖一袋買ってくれたためしがないじゃないか。もつともそれはまあ仕方がないのかもしれない。おれは、とうちゃんのほんとの子供じゃないんだから——。

おれとかあちゃんは野沢というみよ、うじだが、とうちゃんの名は高倉平造という。おれがまだ小さくて、肺炎にかかつて死にかけてた時、かあちゃんは、おれを医者にかけることができなくて、とても困つたらしい。すると、そのころ質屋をやっていたとうちゃんが出て来てペニシリンを買う金を払つた。かあちゃんはそれのお札に料理屋をやめて、とうちゃんの女房になつたのだ。今でもとうちゃんは、おれが言うことを聞かないとすぐ、「こら。おれはてめえのいのちの恩人なんだぞ」と言う。へん！　何がいのちの恩人だい。もし、かあちゃんがもつとおかめだったら、おれは墓中へ、はいちちまつたところなんだ。

質屋の商売がうまく行かなくなつてから、とうちゃんは古着屋をやつて暮している。古着屋といつても、店を出しているわけではない。女の着物やなんかを、どこからか持つて来ては、どこかへ持つて行く。時には、時計や指輪を持つて来ることもある。金に困つた人が売り飛ばしたものか、だれかが夜どつかの家へはいつて持ち出して来たものか、そこところは、おれにはわからない。

不意に板戸があいた。とうちゃんが、どしんどしんと部屋にはいつて来た。

「和夫、ちよつとそつち寄れ」

と、おれをどかしてながながと寝そべりながら、

「おい、流しに置いてあるとうちゃんのヒゲそりシャボン、いじったら承知しないぞ。湯へ行く時は、かあちゃんのを持ってけ——。わかったか」

「わかったよう。いじるもんか、そんなもん」

おれはマンガの本を机の下にけり込んでおいて部屋を出た。台所へ来てみると、かあちゃんは、ガス台の横にぼんやりつつ立って何か思案してるみたいだった。

「ああ和夫」

かあちゃんは、おれを見ると、小さな声で言った。

「かあちゃんね、佐藤のおばあちゃんとこまで行って来るよ。すぐ帰るからね」

「何の相談？」

と、おれはきいた。佐藤のおばあちゃんというのは、かあちゃんのおっかさんのイトコだとかいうばあさんだ。貧乏だけど人がいいので、かあちゃんは、くさくさすることがあるといつもグチをこぼしに出かけて行く。

「相談てわけじゃないけど——かあちゃんもう、とうちゃんといっしょにいるの、いやんなったよ。商売しくじってから、よけい気が荒くなっただみたいだねえ。さっきだって、何でもないことにカンシヤク起して——」

そう言ってから、ふうつと溜息をついて、

「おまえも不びんだと思うけど、別れてくれつつても、おいそれと別れてくれる人じゃないしね」

そんなら、おれとふたりで逃げちまおうか——と言いかけて、おれはやめた。かあちゃんは夜逃げなんかできるがらじゃない。いやだ、いやだと言いなながら、結局あきらめこんじまう。きょうだって、二三時間グチつたらまた気がすんで帰って来るに決まっている。つまりいくじがないんだな、おれのかあちゃんは。

「おなかへつたら、これでパンでも買ってお食べ」

「うん」

かあちゃんがわたししてくれた十円玉を、ズボンのポケットにおしこんで、おれは外に出た。おもては猛烈に暑い。かあちゃんが窓から、麦ワラ帽子をひよいと投げてくれた。

2

山本建設の工事場んとこまで来たら、信公しんこうたちが土管ぐりをやっていた。おれも早速仲間にはいった。五年生としてはチビなので、損なこともあるが、こんな時には大いにトクだ。

監督がやって来てどなりつけるまで、おれたちはすこぶる愉快だった。いつも工事場にいるアバタのおっさんは、おれたちが何をしても怒らないが、監督となるとそうは行かない。おれたちは、散り散りばらばらに逃げてしまった。

草っ原まで来て、おれは立ちどまった。仲間はどこへ逃げたか、ひとりも姿が見えない。目の前の草むらに、曲りくねった松の木がぬうつと立っている。その幹から、こげ茶色の水アメミたいな松ヤニが、たれているのが目にとまった。

「一いち、みつけ！」

あたりにはだれもないが、おれはひとりで声をかけた。おれがみつけたヤニは、おれのものだ。足もとの草の葉をちぎって、掻き取った松ヤニを包んだ。ひとつ、こいつでシャボン玉を作ってやろう。ねばっこいヤニをふんだんに入れたら、アドバルーンみたいなのやつができるかわからないぞ。

うちに帰ると、とうちゃんは昼寝をしていた。六畳の真中に寝そべって、右腕をまくらに、でっかい口をあけている。グウツ——とのどが鳴ると、丸首シャツの胸の所がぶくりとふくらむ。ゴオツ——で引っ込む。グウツ——ゴオツ——地ならしローラーのようないびきだ。

おれは、つま先立ちでとうちゃんのそばを通り抜け、台所へはいつて行った。流しのタナの上に、とうちゃんとかあちゃんの石けん箱が並べて置いてある。それを見たおれは、またとうちゃんが憎らしくなった。かあちゃんのシャボンは、かけらみたいにお小さくて、むこうがすけて見えるほど薄っぺらだ。とうちゃんのシャボンは、おろしたばかりらしく、上側に押してあるマークも、まだほとんどくずれていない。一二度使った痕があるのは、かあちゃんが手でも洗ったんだらう。それでさつき、どなられてたんだ。

とうちゃんは、かあちゃんをいじめるために小言を言う。タネは何でもかまわない。難くせをつけてガミガミ言いきえすればいいんだ。それでなかつたら、たかがシャボンぐらいのことで、大の男があんなにがなる必要はあるまい。そう考えるとおれは、とうちゃんに仕返しをしてやりたくなった。おれは、とうちゃんの石けん箱からシャボンを取り出すと、そっとズボンのポケットにすべりこませた。第一かあちゃんのシャボンじゃあ、削ればすぐになくなって、アドバルーンなんかできるもんか。

その時、どこかでそつと戸のあく音がした。かあちゃんが帰って来たな——と、おれは思った。だが、それつきりだ。こそりとも足音がしない。隣のうちだったらしい。

ところでシャボン玉をやるには筆のジクがいる。特別でつかいやつを作ろうと思ったら、ジクの先に、ミシンの糸巻をはめなきゃならない。いいあんばいにおれは、筆のジクも糸巻も持っている。おれは、ジクを取りに六畳へ引返そうとした。と、不意にとうちゃんのいびきがやんだ。おれは足をとめた。とうちゃんは寝返りをうったに違いない。今出て行っちゃまずいぞ。待て待て。じきにまたいびきをかきだすから。

だが、二分待っても、三分待っても、とうちゃんのいびきは聞えて来なかった。おれは舌打ちした。とうちゃんが目をさましてがんばっているんじゃない、筆のジクなんか取りに行くわけにはいかない。とうちゃんて人間は、寝起きの機嫌が特に悪くて、だれでもかまわずあたりちらす癖があるんだ。だが待てよ。ひよつとすると、とうちゃんは眠ってるのかもしれないぞ。寝返りをうったひょうしに、口を結んでしまったら、もういびきはかかないわけだ。そうだったら、ありがたいんだがな。

おれは忍び足で板戸に近づき、そつと六畳をのぞいてみた。おれは、危なく声をたてるどころだった。いびきをかかないはずだ。とうちゃんは、死んでいた。

3

死んだ人を見たのは、おれはこれが初めてだった。だが、ほんとに死んでいるということは、一目見ただけでわかった。

とうちゃんは、きつきおれが見た時とおんなじかつこうで、右腕をまくらにして寝そべっていた。口は、あけたままだったが、下あごをぐいとつき出し、のどの筋がつっぱったみたいな変なあけ方だった。目は二つともひらいていて、白眼がぎろつとこっちを見ていた。おれの体が震えだした。出て行こうにも、引っこもうにも、足がぎくぎくして動けなかった。

その時、横っちょの方で物音がした。右手の四畳半の畳に、人の影がぼやっとうつつているのが目にはいった。タンスの引出しをあけて、何かしているらしい。

「泥棒だ！」

おれは口の中で叫んだ。とうちゃんは泥棒にやられたんだ。その次に頭に浮んだのは、ここには危い、という考えだった。泥棒は、四畳半をあさってしまったらまたこっちへやって来るだろう。そしておれをみつけて、多分おれも殺しちゃうだろう。

おれは、あとずさりをした。たたきに脱いであったかあちゃんの古ゲタをつっかけて、そろそろ勝手口の戸をあけた。がたり、と戸が鳴った。心臓が、のどの穴まで突き上った。泥棒は気がつかなかったらしい。

いいかげんうちから離れると、おれは一目散につっ走った。通りへとび出したら、目の前に堀薬局のおじさんが立っていた。自転車をとめて、米屋のあんちゃんと立ち話をしているのだ。

「泥棒だあ！」

と、おれはどなった。

「とうちゃん、殺されちまったよオ」

「おどかすんじゃないよ、坊主」

と、薬屋が笑った。おれはじれったくなくて、がらがんわめきたてた。急にふたりは、まじめな顔になった。薬屋は自転車にとび乗って、交番の方へ走りだした。米屋のあんちゃんは公衆電話にとびこんだ。

十分とたたないまに、おれは長谷川巡査の先にたつて、うちの方へ走っていた。長谷川巡査は、信公のおとつあんのチョビひげだ。

うちについた時、泥棒は台所にいた。

「だれだ！」

と長谷川巡査がどなった。

「ああ、助けて」

叫んでとび出して来たのは、なんとかあちゃんじゃないか。

「あんただったのかね。強盗殺人があったと聞いたが」

長谷川巡査のあつけにとられた顔だ。かあちゃんは、ばかみたいに、首をこくりこくり振った。

「あの人が殺されてるんです。早く見てください、早く——」
おれたちは、うちにはいった。

うちの中には、とうちゃんの死骸のほかだれもいなかった。さっきは見えなかったが、とうちゃんのくびすじのうしろに、細いナイフが突きささっていた。畳の上に血が流れていた。でも、人が殺されたにしては、血は案外少なかった。

「即死だな。ここを突かれたんじゃ」

と、長谷川巡査が言った。かあちゃんは泣きそうになって、

「あたしが帰って来たら、こんなことになってたんですよ。なんてむごいことを——」
そうこうしているところへ警視庁の車がやって来た。おれとかあちゃんは台所へ押しこめられた。六畳と四畳半は警察の人が大ぜいろうろしているし、おれのうちには、ほかに部屋がなかったからだ。おれは何だかウキウキしまつて、隣の部屋でやってることをこっそりのぞき見していたが、かあちゃんは真青な顔で板敷にぺたんすとすわったきり、うんともすんとも言わなかった。

六畳の部屋では、医者らしいのが、とうちゃんの死骸をいじっては、あたりの人に何か書き取らせていた。やがて別の自動車が出来て、とうちゃんをどっかへ持って行った。

おれとかあちゃんは、それから別々に呼び出されて、いろんなことを尋ねられた。長谷川巡査よりか大分偉そうな警官がひとりいて、

「では坊やは犯人の姿は見なかったんだな。どんなやつだったか、言えんのだな」

と、おれが気色を悪くするくらい幾度も幾度もそう言っただけを念をおした。

騒ぎがひとしきり治まると、偉そうな警官は、かあちゃんの方に向いて、

「いろいろ聞かなければならんことがあるから、署まで来てもらいます」

と、きつい声で言った。かあちゃんは、ふらふらと警察の車に乗った。いのちの気が抜けちまったみたいで、おれのいることも忘れてしまったのか、こっちを見ようともしなかった。

「かあちゃん、夕めしごろには帰って来る？ おじさん」

自動車が見えなくなった時、おれは長谷川巡査の顔を見あげてきいた。長谷川巡査は、まぶたの垂れさがった細い目をぱちぱちさせて、おれを見た。それからあわてて帽子を取って汗をふい